

大本山永平寺をお開きになった道元禅師は、「袈裟をかけることの功德は廣大無辺であり、一度袈裟をかけることによって、一切の悪を断じ、最高のさとりを完成することができる」と、『正法眼蔵』「袈裟功德」の巻で示されています。

僧侶や仏教徒にとって、お袈裟はとても大切なものです。

お袈裟の語源は、インドの言葉、サンスクリット語の「カシャーヤ」からきています。この「カシャーヤ」はもともと、“目立たない色”“濁った色”を意味しました。この色の名前である「カシャーヤ」から、「袈裟」と称されるようになったのです。

また、お袈裟は信者から施された布や、人が不用になって捨てた布などを拾い集め、複数の布地を縫い合わせて大きな長方形の一枚の生地に仕立てられていました。

現代の日本では、不要になって捨てた布などでお袈裟を作ることは難しくなっていますが、本来のお袈裟に込められた意義は今も変わりありません。

もともと、施された布や捨てられた布を使ってお袈裟を作っていたことを考えますと、使用できるものは出来るだけ手を加えて使用して、物の「いのち」を大切に生かすという教えが示されているといえるでしょう。

お袈裟が複数の布を縫い合わせて作られていることは、一枚一枚の布が糸によってつながってお袈裟となるように、私たちの「いのち」も、一人一人の「いのち」が「縁」によってつながり、支えあって存在していることを伝えているのでしょう。互いにつながり支えあっている「いのち」だからこそ、共に慈しみの心をもって生きるべき大切さが示されています。

さらに、お袈裟のかけ方を見ますと、僧侶は右肩をあらわにして、お袈裟をかけます。この右肩をあらわにするのは、インドにおける風習で、目上の人に対し、いつでもお役に立ちますという礼儀を表しているといわれています。

このように、お袈裟にはさまざまな教えと願いが示されているのです。

正式なお袈裟の他に、お袈裟を簡略化した「絡子」や「輪袈裟」があります。「輪袈裟」は一般の方でも身につけることができますので、是非「輪袈裟」を着用して、お袈裟の功德とその意義を感じていただきたいと思います。